

---

# 薄給、しかし重労働

片岡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薄給、しかし重労働

### 【Nコード】

N8539X

### 【作者名】

片岡

### 【あらすじ】

淫魔な主人公。全く給料をくれない魔王様の元、必死に頑張っています。

妹可愛いよ俺のオアシス。

魔王様（前書き）

数話で完結予定。多分。

## 魔王様

「おい、おい！ ッラプトル！！」

「……はい、ラプトルは此処に」

「遅いッ！！」

淫魔であるワタクシ、ラプトルの一日は、魔王様の怒声から始まる。

何がどう間違っただろうになったのか、俺は何故か魔王様の側近という立場にある。正直降りたい。

「ラプトル、先月分の働きの報酬を取らせる」

「は、有り難き幸せ」

差し出した両手に落とされたのは、銅貨一枚。ふざけてんのかと言いたい。

が、魔王様と俺では力の差は歴然。何も言わずに身に余る光栄だとかなんだとか言って去るしかない。何これすげえ馬鹿馬鹿しい。

最初は一応それなりにもらえてただけど、いつからかすっごく報酬が減ったんだよな。

ちくしょう、魔王様なんて見た目まんま美少女なのにどうして敵わないんだ……！！

というか俺、めっちゃくちや頑張ったじゃん。この間なんて勇者に

盗られた皆一人で奪い返してきたじゃん。

本来下級悪魔である淫魔に無茶させすぎじゃね？下級のくせして  
なんでか普通の淫魔よりは力あるけどさ。

「……ラプトル」

「はい、なんででしょう」

んだよさつさと帰らせるやとかメンチ切りたいの必死に抑えて愛  
想笑い。何これ俺めっちゃ大人。

「なんでもない！」

なんでもねえのかよ！！ だったら話しかけんな！！

思わず怒りで頬が引き攣る。

今にも怒鳴り声を発しそうなこの口を必死に抑えてまた笑う。

「それでは失礼致します、美しき我が君」

え？ このふざけた文句はなんだ、って？

いつだったか冗談（つか冗談とかよく言えたな、あのときの俺。  
命知らず）で言ったらなんか魔王様が入っちゃったんだよ。

つーかなんか今日の魔王様露出度たけえ。どうしたんだろ。何  
かにお目ざめになられたのか。

「っお、い、おい！ ッラプトル！！」

震える声で、側近の名を呼ぶ。ただの淫魔。奴はそれだけの存在であるはずなのに、どうして私の心をこつもかき乱すのか。遅れて聞こえた甘く低い声に、思わず背筋がぞくりとした。

「……はい、ラプトルは此処に」

「遅いッ！！」

ラプトルのその独特の雰囲気<sup>きふき</sup>に吞まれてしまわれぬよう、被せるように怒声を浴びせる。

そうでもしなければ、情けないほどに蕩けてしまいそうだった。

「ラプトル、先月分の働きの報酬を取らせる」

そう言うと、ラプトルは恭しく<sup>まじまじ</sup>跪き、両の手を差し出した。その手に乗せるのは、銅貨一枚だけ。

こんなに少ない報酬なのは、別にラプトルが仕事をサボっているからだとか、そういうわけじゃない。この間とて、勇者に奪われてしまった砦をたった一人で見事奪還してみせたのだ。

これほどまでに素晴らしい働きを見せるラプトルの報酬が少ない

わけ。それは、ある日の出来事が原因だった。

ある日のこと、いつものように素晴らしい働きを上げたラプトルに、何か欲しいものはないかと訊ねた。

ラプトルは悪魔にしては、そして、淫魔にしては驚くほどに欲が無い。

だが、いつまでも金だなんていうつまらない報酬ばかりやるのも心苦しい。だから、欲しいものはないか、と訊ねたわけだ。

「欲しいもの、で御座いますか」

「ああ、なんでも言え。食糧にんげんか？それとも土地か。……部下をつけてやっても良いぞ？」

「いえ、特に御座いません」

何を言っても首を振るラプトルに、私は困り果ててしまった。すると、不意にラプトルは立ち上がり、私の頬に手を滑らせた。

その丁寧すぎる仕草に身体がビクンと揺れた。

「な、んだ」

「ほしいもの……。強いていうならば、ラプトルは“これ”が大層欲しくて堪りません」

「っひ……。!?」

耳元で囁かれ、身体が粟立つ。耳に柔らかい何かが当たった。軽くラプトルを突き飛ばせば、ラプトルは甘く妖しい笑みを浮かべて私を見ていた。口許できらりと輝いたのは、

「私の……、イヤリング……？」

「では、確かに報酬、受け取りました」

耳に手をやると、無い。そしていつの間にかもう片方のイヤリングも取られている。

イヤリングを持ち、挑発的にそれに唇を落としたラプトルに、思わず私は赤面してしまった……。

「……ラプトル」

「はい、なんでしょう」

報酬などとはおこがましいものを受け取り、さっさと立ち去ろうとするラプトルに、私は声をかけた。

あの報酬は、嫌がらせだ。魔王であるこの私を、あのとき、少しでも動揺させたことへの罰だ。

しかし、ラプトルは何も言わず、笑顔でそれを受け入れる。

今だって、甘い甘い笑顔で、私を見つめているのだ。

何もかも放り出して、縋りついてしまいたい気持ちに駆られなが

ら、目を逸らした。

「なんでもない！」

馬鹿か私は！！ 何も無いなら話しかけるな馬鹿！！

しかし、ラプトルはそんな私の奇行を気に留めることもなく、微笑んで言った。

「それでは失礼致します、美しき我が君」

妖しく甘さが滴るその声色に、思わず頬がカッと熱くなる。

「……………淫魔ごときに……………」

魔王であるこの私が乱されることなど、あつてはならぬことなのに。

しかし、どんなに悪態をつこうと甘く疼くこの心だけは誤魔化しきれまい。

魔王というのは、両性具有の生物である。私は魔の王という立場にある故、いつかは子を成し、血を残さねばならない。

「……………」

ラプトルなら、ラプトルになら、この身を捧げても、雌になってもやっても良いと思える。

胸元で拳を握り、自分の身体を見下ろす。

何故か身体が発達せず子供のような体型ではあるが、それでも容顔が整っている私は十分魅力的なはず。

メイドのアドバイスを聞いて服も少し過激なものにしてみた。なのに、

「……淫魔のくせして、どうしてあいつはこうも鈍いんだっ！！」

私がこんなに肌を晒すのはお前の前だけだと言っのに！！

魔王様（後書き）

両性具有がお相手はBLですか？

## 可愛い妹

「にいさま、おにいさま。ラプトルおにいさま？ 何処にいるの？」

大きな瞳を涙で濡らし、俺を探して歩き回る可憐な少女。これ以上虐めてやるのは可哀想だと、静かに歩み寄った。

後ろから抱き締めて、優しく囁く。細い肩が小さく跳ねた。

「ツェン。ツェン。ああ、可愛い俺のテンツェリン。俺は此処だよ」  
「おにいさまっ！」

ぱあつと表情を輝かせ、俺を見上げる愛しい子。  
人間だけれど、大切な俺の可愛い妹。

ああ、ほんつと可愛い。俺の天使だ。オアシスだ。まるで太陽みたいな子。砂糖菓子みたいにふわふわしてて甘い香りがして、可愛い。

俺は浅黒い肌に金色の瞳。そして真っ白な髪。

テンツェリンは真っ白い肌に青色の瞳。そして太陽のように輝く金髪。耳元には赤いイヤリングが輝いている。

濃い魔力が籠められたこのイヤリングはいつか魔王様からいただいたイヤリングだ。

前々からこの子の身を守るために魔具が欲しかったんだけど、上

質なものは高くて手が出せるようなものでは無かったから本当に助かった。

それに、この深紅のイヤリングはこの子の真っ白な肌に映えるとずっと思っていたから。

他の者が身に着けていたアクセサリをやるのは少しどうかと思っただけど、仕方ない。

「おにいさま、ラプトルおにいさま。わたしね、ご飯を作ったのよ。食べてくれる？」

「ああ、テンツェリン。気持ちは嬉しいよ。だけど、お兄様はもっと違う、別のものが欲しいな」

「っお、おにいさま……!!」

「冗談だ。そんな可愛らしい顔をしてくれるなよ」

悪戯っぽく笑って冗談を言っていると、すぐに顔を赤らめるテンツェリン。

ああ、本当に初心はつこで可愛らしい。そして自分で自分が気持ち悪い。何もつと違うものが食べたいって。俺は何処の変態親父だ。

「……………」

しかし、困った困った、と頬を掻く。木製のテーブルの上にずらりと並ぶのは美味しそうな料理たち。

頑張つて作ってくれたツェンには悪いが、俺は淫魔であるからして、人間の食べ物に飽くまでも嗜好品の域だ。腹が満たされることは無い。

俺の食糧は人間の精気。

「おにいさま、今日はね、パンが上手に焼けたのよ」

「ああ、美味しそうだね」

とりあえず料理デザートを楽しんでから、人間メインディッシュを食べに行くとするか。

いつもテンツエリンが眠ってしまった後に家を出て人間界に降りるんだが、なんとなく罪悪感があるんだよなあ。

こう……、恋人がいるのに浮気にいっててる気分。まあ、生きるためには仕方の無いことなんだけど。

格好良いおにいさま。優しいおにいさま。わたしの自慢のおにいさま。

ある日、魔界に堕ちてしまったわたしを優しく抱き締めてくれたおにいさま。

ある日、魔界に堕とされてしまったわたしを優しく受け止めてくれたおにいさま。

汚らしい私を抱き締めて、太陽のようだと、天使のようだと笑ってくれたおにいさま。

好き、好き好き。ああ、大好き！だあいすきよおにいさま！

おにいさまのためならなんだって出来る。おにいさまがわたしの全てなの。

「おい、さま……?」

おいさまの為に料理を作って、疲れていつの間にか眠ってしまったようだ。

慌てて飛び起きて料理を見にいくと、大丈夫、そんなに時間は経っていない。料理からはまだ微かに温もりが感じられた。

それにしても、帰ってくるのが遅い、ような気がする。

いつもは日が暮れる前には帰ってきてくれるのに。

不安になって玄関まで行くと、マットには真新しい土がついていた。

「……帰って、きてる……?」

家の中にいらっしやるのかしら。見渡しても愛しい姿は見つからない。

「おいさま……?」

二階へ上っておいさまを探す。いない。寝室にあるベッドに乱れはないから、多分二階には来ていない。

じゃあ、何処にいるんだろう。

そう考えたとき、わたしは恐ろしい考えに辿りついた。

もしかして、おにいさまはわたしに愛想を尽かしてしまったんじゃない……？

だから、わたしを置いて、何処かへ行ってしまったんじゃないだろうか。

サツと顔が青褪めたのが、自分でもわかった。

わたしには、わたしにはおにいさましかいないのに。

また捨てられるの？置いていかれるの？いや、いや、そんなのいや。

お願い、おいてかないで。良い子にするから。

「にいさま、おにいさま。ラプトルおにいさま？ 何処にいるの？」

ああ、泣いてしまいそう。

おにいさま、お願いです。テンツェリンの前に姿を見せて。

わたし、これからもっと、うんと良い子にするわ。これまで以上に、良い子にしているから。

「ツェン。ツェン。ああ、可愛い俺のテンツェリン。俺は此処だよ」

不意に、お美しい声がわたしの鼓膜を震わせた。優しい温もりに包まれ、パツと俯かせていた顔を上げる。

「おにいさまっ！」

弾んだ声でおにいさまを呼ぶ。おにいさまはわたしの呼び掛けに微笑みで応えてくれた。

格好良いおにいさま。わたしを救ってくれたおにいさま。

ああ、いつでもおにいさまはお優しい……。

袖を引き、ねえねえとお話を強請る子供のようにおにいさまに縋る。

ねえ、おにいさま、わたし、頑張ってお料理をしたの。おにいさまのために。食べてくれる？

そう言うと、おにいさまはうっそりと笑い、長い指をわたしの頬に滑らせた。

「お兄様はもっと違う、別のものが欲しいな」

「っお、おにいさま……！！」

脳が甘い痺れに貫かれた。顔に急激に熱が集まる。思わずおにいさまを凝視すると、おにいさまは言った。

「冗談だ。そんな可愛らしい顔をしてくれるなよ」

ああ！ 冗談だなんてそんなこと言わないで！

冗談でなくて良いの！ 本当で構わないの！

ねえ、わたし知ってる。知ってるわ。

おにいさまは夜になると何処かへお出掛けになられるの。

それはきつと、お食事をしに行ってるのよね。

だって、おにいさまは淫魔だもの。人間の食べ物でお腹がいっぱいになるわけがない。

ねえ、わたし知ってるの。子供じゃ、ないのよ。魔界では子供でも、人間界ではもう成人してるもの。

おにいさまがどうやってご飯を食べるか知ってるの。生きるためだもの、仕方ないよね。

食べられたご飯はどうなるかも、知ってる。

だけど、それで良いの。魂を抜かれても、それがおにいさまの糧になるなら、わたしはそれで良いの。

でも、おにいさまはそんな言葉望んでないものね。

「おにいさま、今日はね、パンが上手に焼けたのよ」

「ああ、美味しそうだね」

だから、わたし今日も笑うわ。

可愛い、おにいさまの良い子な妹であるために、何も知らないふりをして笑うの。

ねえ、わたし、なんにも知らない。

何も知らないままの良い子のわたしでいるから、お傍においてね。

## 可愛い妹（後書き）

キモウト（＝キモい妹）にはしたくなくて頑張ったんですが、どうでしょう。

見た目の年齢は、

魔王様 12～5歳

ラプトル 二十代後半

テンツエリン 十代後半～二十代

っていう設定です。一応。

## 同族（前書き）

ちよつと更新しなすぎたから頑張つて書いたらやっぱりぐだぐだに。

## 同族

「ラプトル」

「……フィアールカ」

色気たっぷりな声と共に後ろから首に回されたしなやかな手。驚きで情けない悲鳴を上げそうになるのを堪えて、首だけで振り向いた。

そして、其処にはやっぱり予想通りの奴がいた。

「相変わらず釣れない男だねえ、フィアで良いって言ってんのに」

「フィアールカ」

「……ホント、つまんない男」

怨み言を吐くようにぼそりと呟かれた声に気付かないふりをして、彼女の身体を引き離れた。いったいなんの用なのだと見ると、フィアールカはくすくすと笑った。

浅黒い肌に金色の瞳。白い髪。肉感的な人間から見たら大層魅力的な女。

そんなフィアールカは俺の同族。つまりは淫魔だ。淫魔とは本来非力なものだ。しかし、フィアールカも俺と同じく、“例外”の淫魔である。

「ラプトル、今夜、どう？ お互い相手もいないだろうし、腹だつて減っちゃいないだろう？」

「断る。俺はそういう非生産的なことはしないんだ」

「……釣れないねえ」

淫魔は同族同士で子を成すことはできない。だからか、淫魔は同族に欲情することはない（これも例外がいるにはいるらしいが）。

……まあ、そういう交わりが無いって言ったら、嘘になるけど。

淫魔にとつてはハグもキスも“そういうこと”も、全て挨拶のようなものだ。貞操観念なんて無に等しい。

「あんたみたいに食事のときしかシない潔癖な奴つても、珍しいよ。あんた、あたしらの中で浮いてるって自覚あるかい？」

勿論だ。そのせいで俺は同族の中では少し顔が知れ渡っている。

俺を遠巻きに見ては数人で集まってこそそこそこそこ。

俺が傷つかない淫魔だとも思ったか。大間違いだ。

「あるに決まっているだろう」

「だから、あたしが淫魔らしい淫魔にしてやろうとしてんのに、」

何かを続けようとした口を人差し指でそつと閉じて、くすりと笑う。ああ、こんなふういきよんとした顔は子供っぽくて可愛いのに。

純粋な子が俺のタイプだ。いや、ロリコンとかじゃなくて……。

「お前に俺が満たせるとは思わないがな」

淫靡らしい淫魔。人を惑わせ、精を貪る醜い悪魔。俺はそれだけのものにはなりたくない。成り下がりにたくない。

下剋上だとか、そんなことは考えてはいないけれど、せつかく強い力を持って産まれたんだ。

それだけで終わるなんて、そんなの勿体無いじゃないか。

俺と同じフィアルカにならわかんと思っただけど、やっぱり無理なんだろうか。だって、フィアルカは誰よりも淫靡らしい淫魔だ。

だから、フィアルカには俺は満たせない。ぶつちやけ肌を重ねるよりも頭を撫でるとか、ハグとか、キスとか、そういう軽いスキンシップのほうが俺は好きなんだ。

生き延びるために、食べるためにそういうことをするのは、なんだか嫌だ。人間にとって“こっぴつた”行為が愛を象徴するものだと知ったときはもつと嫌になった。

……悪魔で淫魔である俺が愛を語ろうとは思わないけど、なんとなく、さ。

俺みたいな出来損ないにそんなことを言われたのがよっぽど屈辱だったのか、フィアルカは顔を真っ赤にして俺を睨みつけ、背中の翼で飛んでいってしまった。

……あいつ、怒ると怖いんだよなあ……。

澄ましてて、なんか気に喰わない奴。

それがあいつ、ラプトルの、あたしの第一印象だった。

だけど、言葉を交わしていくうちに結構面白い奴だな、なんて思ったりして、成人する頃にはすっかり骨抜きにされていた。

淫魔であるあたしが淫魔に堕ちるなんて、なんて馬鹿馬鹿しい。

いつだったか、聞いた言葉。

「ラプトルは幼女趣味らしい」

そのとき、落雷を身に受けたかのような物凄い衝撃があたしに走った。

ああ、そういえばあいつはいつだってそのようなことを言っていたじゃないか。

「純粋な子が、好みなんだ」

「キスだけでも、顔を赤らめてしまつような子が良い」

……今時、人間にだってそんな初な奴はいない。だけど、それは年頃の娘の話であって、それが幼い少女であればどうだろう。

いくらでも、ラプトルの望む反応を返す娘はいるだろう。

それに……、あたしは自分の身体を見下ろした。

子供のようなつるつるぺったんな身体ではなく、無駄に豊満に育ったこの身体。顔だって子供の頃から大人っぽいと言われていた。淫魔としては良いのかもしれないが、ラプトルの好みからは大きく外れている。

しかし、それをいくら悔いてもこの身体が変わるなんてことはなく、年々胸は膨らんでいく。一時期削ぎ落してやろうかとも思ったほどだ。

だから、せめて清い身体を保つ。ラプトルのために、あまり性にはふれないようにしよう。

だが、それにだって限度がある。あたしだって死にたいわけじゃない。だから、こっ……、お口で……によこによくらは許してほしい。

前までは、それで満足してた。ラプトルとは仲が良いほうだったし、無理に誘いでもしない限りはあいつだって優しいのだ。

……前までは、満足していたんだ。だけど、それは魔王様がラプトルに目をつけたことで崩れた。

同族のあたしまで墮ちるような良い男だ。そりゃ誰かしらひっかけてしまっただろうとは思っていたが、まさか魔王様が釣れてしまうとは……。

しかも、魔王様はラプトルのドストライクだ。つるつるぺたぺたな身体。顔は甘いベビーフェイス。

勿論、あたしは焦った。何年も何年もラプトルだけ見て、時には命の危機に瀕したことだってあったのに、いくら魔王様であれどポツと出の奴に出しゃばられて良い気はしない。

だからだと思う。焦ってしまったから、あたしは此処最近控えて

いた誘惑を、ラプトルに仕掛けてみた。

容易にかわされてしまうとは思っていたけれども、何かをせすにはいられなかった。

「ラプトル」

「……フィアールカ」

ラプトルの後ろから回した腕をするりと撫でられ、思わず悲鳴が飛び出そうになった。だけど、堪える。

それは“淫靡らしい淫魔のフィアールカ”がとって良い行動じゃない。成人したのに未だ処女だなんて知られたら色々まずい。

はあ……、それにしても良い香り……。ばれない程度にすんすんと鼻を鳴らしてラプトルの香りを堪能する。

ラプトル独特の甘い香り。この香りで雌共を惑わせているのかと思うと、嫉妬が胸をちろりと舐め上げる。だけど、そんなものおくびにも出さない。

いつもの渾名呼びもやっぱりかわされ、本題に入る。

緊張で渴く唇をぺろりと舐めた。でも、きつとラプトルには挑発をしているように見えただろう。それで良い。

「ラプトル、今夜、どう？ お互い相手もいないだろうし、腹だつて減っちゃいないだろう？」

「断る。俺はそういう非生産的なことはしないんだ」

「……釣れないねえ」

“非生産的”。その言葉があたしの心を切り裂く。そうだ。確かに、生産的でない。淫魔は同族とは子を成せない。

そして、ラプトルは無駄な行為を好まない。わかりきっていたことだけれど、面と向かってそう言われてしまつとやはり落ち込む。

ちよつと憎たらしくなつて子供みたいな悪態を吐く。だけどラプトルは顔色一つ変えない。

ああ、だから、なんであなたは、苦し紛れにぼつりと一言。

「だから、あたしが淫魔らしい淫魔にしてやるうとしてんのに、」

あんたはそうやってあたしに見向きもしない。あたしの言おうとしたことがわかったのか、わからなかったのか、ラプトルはくすりと笑った。

間近でそんな顔をされると平静を装うのにかなりの精神力がいるからやめろ。

「お前に俺が満たせるとは思わないがな」

思わず顔が赤くなった。

“満たせるとは思わない”。ラプトルの言葉が指すのは、きつとあたしのテクニク。

何しろあたしは一度たりとも雄に身体を許したことがないのだ。

きつと百戦錬磨のラプトルにとっては物足りないものになるだろう。

バレて、いた……。

照れ隠しにキッと睨みつけて、真っ赤になった顔を覆い隠してラ  
プトルの目の前から飛び去った。

ああああ！！ 明日からどんな顔して会えば良いのさ！！ 馬鹿  
！ 馬鹿！ 馬鹿！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8539x/>

---

薄給、しかし重労働

2011年12月31日00時52分発行